

（寄稿）

MOOCs のインパクトと看護教育の未来

熊本大学 鈴木克明

大学教育における ICT 利用をめぐって最近、世界的に注目を集めている事象に「反転授業」と「ムークス (MOOCs)」がある。「反転授業 (Flipped classroom)」とは、これまで教室で行われていた情報提供（インプット）を家庭でできるようなビデオを準備し、その代わりに教室では宿題に出されることが多かった演習問題を行う（つまり、今までと逆の授業方法にするから「反転」というムーブメントである。せっかく教室に集まった機会に単に一方的な講義を聴くよりは集まってしかできないことをやろう、という発想はとても良い。「どうすれば寝ないで（あるいはケイタイをやらずに）話を聞いてくれるか」とお悩みの教員にとっては、学習者を活動的にするという手法は魅力的であろう。学習者にとってもビデオで話してくれるのであれば本を読むよりはとっつきやすいし、わからないところは繰り返し視聴できる（わかっているところは飛ばせる）マイペース学習も朗報だ。これまでも、オーダーメイドの講義（沼野一男）を始めとしたこの種の試みは多く存在し、それぞれに効果を上げてきたが、「反転授業」というラベルが貼られることによってこれまで主流の講義形式とは異なる授業のやり方が市民権を得て、眠くなりがちな一方通行の講義が教室から姿を消すとしたら、それは歓迎されるべきことである。

「反転授業」を可能にしたのは、インターネットの高速化とその上で展開される YouTube などの自作動画投稿サイトの一般化である。遠隔地で暮らす甥っ子の家庭教師役を担うために自分で撮影した数学の解法などの短い説明ビデオを動画投稿サイト経由で届けることを思いついた。このことが発端になって始まった「カーンアカデミー」は現在ではグーグルやビルゲイツ財団からの支援を受けて数千種類の無料学習コンテンツを提供する世界有数のサイトになった。例えば、細胞分裂を講義する代わりに、「明日の授業の前にカーンアカデミーにある細胞分裂のビデオを見てくるように」と指定すれば、細胞分裂を学ぶ「反転授業」が可能になる。この可能性に刺激を受けた高校の教師たちが自分の授業用ビデオを自作して動画投稿サイトに公開し、自分流の「反転授業」を展開するようになった。この方式はいくらでも応用が可能だ。細胞分裂のビデオを探してきてそれを授業前に視聴させても良いし、あるいはビデオを自作して提供しても良い。さらには、インターネット検索で細胞分裂についての情報を自分で調べて結果を持ち寄る予習を課しても良いし、インターネット上の細胞分裂についてのサイトを指定してそこをあらかじめ見てくるように指示することもできる。いずれも濃密な授業時間を過ごす準備となり、手ぶらで授業に臨むよりは有効だろう。

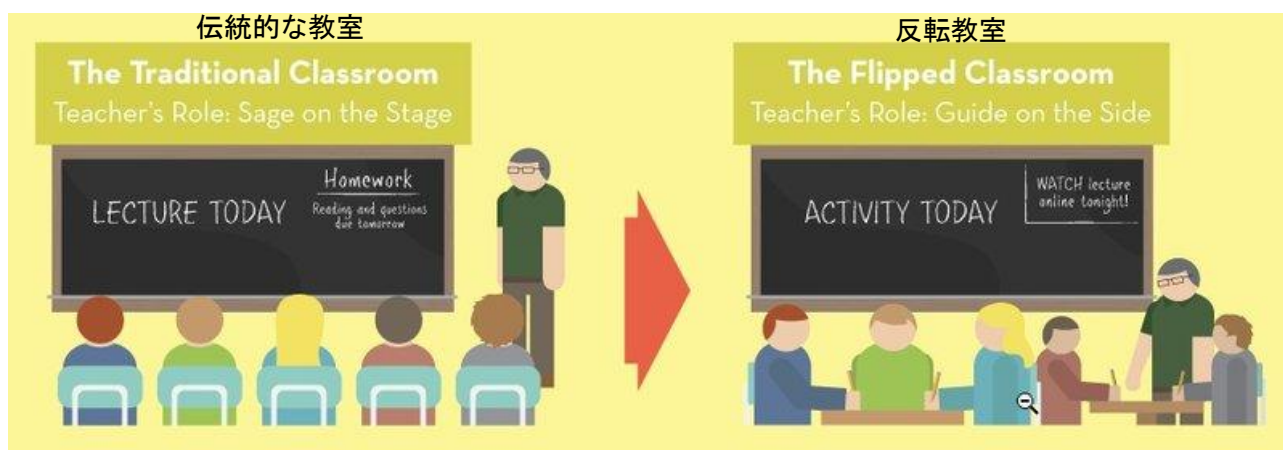
もう一つの流行語 MOOCs は、Massive Open Online Courses の略で、大規模公開オンライン講座と訳されている。著名な大学が提供する講義をインターネット上で受けて、課題をこなして合格点に達すれば「修了証」がもらえる仕組みである。一度公開したら世界中

から数千数万の受講者が集まってくることから、「大規模」がついた名称が使われるようになった。何しろ無料で一流の教育が受けられるし、「修了証」が職探しや進学にも有利に働くようになったため、ますます注目され、数百万人規模の会員を集めて「大規模化」が進んでいる。世界で最初に MOOCs が誕生したのは 2012 年のことであり、その進展の速さは目にもとまらないほどである。2013 年には日本語による無料コース提供を目指した日本版ムーク（一般社団法人日本オープンオンライン教育推進協議会：JMOOC）が組織され、2014 年 4 月からコース提供を開始した。JMOOC では、「日本はもとより広く ASEAN を始めとするアジア諸国においても提供し、日本への留学希望者や日本企業への就職希望者に対して必要かつ有効な学習機会を提供」していくとともに、「反転授業」の効果が認識され「大学教育の形態が大きく変化する可能性があることからその日本での確立を図って」いくことを狙っている（いずれも <http://www.jmooc.jp/about/> より引用）。

MOOCs は 2012 年に始まったばかりであるが、その背景には米国の MIT が 2001 年に始めた大学講義資料の公開という動きがあった。オープンコースウェア（OCW）と呼ばれるこの教育資源のインターネット上での公開は約 50 か国で総計 2 万 5 千科目にも及び、日本でも 2005 年に設立された JOCW 加盟大学から合計 3 千科目がすでに公開されている。OCW が資料の公開のみに留まっていたのに対して、MOOCs では受講者の実力診断と「修了証」の発行までが含まれるようになった。「見るだけは無料だからよかったら出願してね」という宣伝のために始められた OCW が、インターネット上だけで完結する学習機会へと発展したのである。この進化が周囲に与える影響は未知数ではあるが、英語から日本語へ、そして見るだけから修了証の発行へと加速する動きは、「対岸の火事」では済まされなくなるかも知れない。

看護教育は、この先、どういう影響を受けるだろうか。国家試験に受かるための勉強であれば、インターネット上の無料公開講座で事足りるようになるかも知れない。実際、模擬試験などの練習は、人間がみてあげるよりは教材提供会社が作成したオンライン教材の方が効果が高い（少なくとも効率はよい）とも言われている。それが無料になるのであるから、多かれ少なかれ影響はあるだろう。無論、看護教育は国家試験合格を目指してだけ行われるものではない。手技を伴うスキルの育成とか、患者さんとのコミュニケーション力、あるいは看護に対するプロ意識の醸成やプロとしての立ち振る舞いや行動など、人間を相手にする仕事だからこそインターネット上だけでは習得が困難な学びもある。それらをすべて MOOCs で賄えるかどうかを考えることにはあまり意味がない。むしろ、人間が対面で教えなければならないことは何で、MOOCs などの他の手段に任せた方がより効果的で効率的なものは何かを区別することこそが重要だろう。そうすることによって、年々「教えなければならない事項」が増え続けてカリキュラムを圧迫している授業時間不足を解消し、注力すべきことを洗い出してメリハリをつけることが期待できるのではないだろうか。何だかんだ言っても、実際には情報をインプットしている時間が長くなりがちな講義中心型の授業の現状を見直すきっかけになればよいと思うのである。

落ち着いて考えてみれば、自作のテキストを使って授業をしている一部の教員を除いては、他者が書いたテキストを使って授業を行ってきた。それでも執筆者でない教員が教室において果たす役割がなくなるわけではない。学習者に向かってテキストに書いてあることを解説することを止めて、学習者が自分で直接、テキストの中身を把握しようと努力させるように仕向けたとしても、それでも教室にいる教員の役割はなくなる。最後まで残るのは、学習者の学びに寄り添い、「私とあなた」の二人称の関係性を保って側方から支援し、理解を促進する方法や疑問点を解消する方法を伝授して、テキストと上手に向き合い自分の学びを進められるような人に育てていく役割であろう。この役割は、学習者との間で三人称の関係性しか持ちえないテキスト執筆者や MOOCs 提供機関には果たせるものではなく、教室で教える教員の役割として決して消えることはない。このことだけは、どんな時代が来ようとも、変わることはないだろう。教壇に立つ教員が、学習者全員に画一的な情報提供をする役割を超えて、個々の学習者にとってより良い学習支援者になるように精進することが求められている。この役割変化への要請が、「反転授業」や「ムークス」の到来により、より鮮明になっているのである。



反転授業のイメージ（オンラインの学習システムを手掛ける米 Knewton が開設する Web サイト「The Flipped Classroom Infographic」<http://www.knewton.com/flipped-classroom/>より）。講義を宿題にすることにより、教師の役割が“壇上の賢人”から“学習者に寄り添う導き手”に変わる

出典：山内 祐平（2012）講義が宿題になる——「反転授業」：カーンアカデミーが変えた講義と宿題の関係。

教育と ICT Online（日経 BP 社）2012 年 5 月 23 日

<http://pc.nikkeibp.co.jp/article/column/20120518/1049903/>